

〔特別寄稿〕

藍野紀要発刊 30 周年に寄せて

田 中 俊 典^{*,**}

藍野紀要がついに第 30 巻を迎えます。微力ながら刊行に関わってきたものとして、心より嬉しく思うとともに、途切れずよく続いてきたものだと感慨も一入です。私立の学校法人、なかでも医療関係で、いわゆるマンモス大学ではない本学のような小規模の学校が、長きにわたって紀要誌、さらには姉妹誌である英文の Aino Journal を、査読もあるきちんとした形で発刊し続けてきたことは、他に類を見ない素晴らしいことです。次の 10 年も、その次も、学校が存続する限り両雑誌は作られ続けていってほしいと思います。

私が編集実施委員長として本誌に関わり始めたのは平成 18 年度の藍野紀要第 20 巻からです。それまでも編集委員として編集会議などには参加していたのですが、この号からは編集長の元で実際の編集作業の指揮をとる役割を担うようになりました。編集実施委員長の仕事にはもう一つ、巻末の編集後記の執筆があります。すべての論文が出揃って発行の準備が整った時に、編集者の立場から一言述べることが許されるというわけなのです。この習慣がいつから始まったのか詳しくは存じませんが、私も先例に従い毎回好きなことを書いてきました。下らない雑文ですが、今回 20 巻から 29 巻まで並べて見直してみますと、それなりに面白いものでしたので、この機会にまとめて振り返ってみたいと思います。

第 20 巻

この巻は記念号で、今回の 30 巻記念号のように、藍野グループのいろいろな先生方に寄稿をお願いした

ことと、1 巻から 20 巻までの総目次および全執筆者索引をつけたことを紹介しました。この巻の話題は「20」という数字についてでした。マヤ文明の 20 進数とか score の語源は 20 個であるとか、愚にもつかない蘊蓄を垂れています。それではついでに「30」という数字になにか意味はないのでしょうか。まず思いつくのが 1ヶ月の日数。その他土星の公転周期とか、1, 2, 3, 4, それぞれの二乗の和、であるとか……とまあこんなふうに、雑誌の内容とまったく無関係の話題を芋づる式引っ張り出して書くというスタイルになったのもこの巻が始めというわけであります。

第 21 巻

この巻では「藍野」という名前について色々書きました。まずアイヌ語ではアイヌのことを「アイノ」と発音するという話。そして藍染から「出藍の誉」と言う成語に行き、教育の話へつなげるという(かなり無理矢理な持っていき方の)話です。ところで上のアイヌ語の話はどこかで聞きかじったものだったのですが、実は先日その証拠と言うべきものを見つけました。写真は 1910 年の日英博覧会当時の古い絵はがきです。博覧会では日本の紹介としてアイヌの人たちが住み込んで生活や習俗を披露したらしいのですが、その 1 シーンだと思います。下の方の説明を見ると「In the Aino Home, Japan-British Exhibition.」と書かれています。これを見ると少なくとも発音的にはアイヌはアイノに近かったのは間違いなさそうです。ちなみに編集後記にも書きましたが、「アイヌ」とは「良い人間」

* 藍野大学短期大学部第二看護学科

** 藍野大学紀要編集実施委員長



という意味のアイヌ語だそうですので、「藍野大学」とは「良い人大学」ということになるらしいです……。

第22巻

この巻が出たのは発行の遅れから11月でしたので話題としては紅葉のことを取り上げています。「もみじ」とは揉み出すに由来するという、例によって語源の話と、あの色は抗酸化作用のあるアントシアニンというポリフェノールであるので抗酸化作用が期待される、というちょっと医学的な話題です。論文とは脳髄から「揉み出す」ように生み出される「紅葉」であり、論文の渉獵はまさに紅葉狩りなのである、という相も変わらぬ牽強附会さですが、今でもちょっと良い比喻だと思っています。

第23巻

図書館の方から23巻の編集後記の執筆依頼がきたのは、うらかな春の日でした(多分ですが)。そこで「うら」という言葉は「心(うら)ぶれる」のように「心」のことを表すのだ、という話から始めました。ついで「占う」も「裏側にある見えないものを知る」から「心(うら)なう」というのだという話に行き、なぜかいきなりダンゴムシの話題になり、最後には表から見えないものが心であって医療とは心を砕いて、遣って、配らなければならないという、教訓的な話に成っています。ダンゴムシについてはたまたま『ダンゴムシに心はあるのか』(森山徹)という本を読んだからですが、とにかく語源的な話を無理矢理良いお話に引っ張っていくというパターンが好きなのです。

第24巻

24巻が発行される前の年(平成23年)、藍野大学の岸田秀樹先生が癌のため永眠されました。先生には紀要の編集委員として大変お世話になり、人物としても尊敬できる立派な方でした。その岸田先生の遺稿を掲載したのがこの巻になるのですが、発刊が先生のご存命中にはできず、非常に残念なことでした。編集後記では先生の論文から『しかし、だれが何と言おうと、ヒトは愛なくして生きることのできない動物であり、愛の形は多様かつ複雑である。大阪は今も、自らを賭けて愛の形を探求し、育む人々が賑やかに住まう、恋の街であり続けている。』という印象的な文を引用し、心の中では追悼号であると思いながら上梓したことを思い出します。

第25巻, 第26巻

25巻の論文数6編、26巻では5編と投稿が低迷していた時期です。そのためか編集後記への力の入れようも、そんなことがあってはならないのですが、弱かったようです。25巻ではiPS細胞を発見された京都大学の山中伸弥先生の話を取り上げました。再生医療の話から、『本誌がまことにささやかですが、科学の発展の一翼を担うことができたら願って止みません。』などという大言壮語で締めくくっているのは、赤面の至りです。ところで、その山中先生が所長をされている京都大学iPS研究所が寄付を募っているということを知りました。ホームページによると、教職員の9割以上が非正規雇用、財源のほとんどが期限付きであることから、長期雇用や若手研究者の育成などに使える資金が必要なのだと言うことようです。本来国を挙げてもっと支援すべきじゃないのかと義憤にかられ、微々たる金額ですが寄付をさせていただきました。税金対策などと考えたところが我ながらセコイですが。

第27巻

この巻の発行された平成27年1月に藍野グループに新しい施設が完成しました。アイノピアです。それまで藍野グループの建築物の外壁は、ベージュから濃茶色タイル貼りとはほぼ決まっていたのですが、アイノピアではご存知の通り、白い建物になっています。聞くところによると白鳥をイメージしたとのこと。そこ

で編集後記では白鳥からヤマトタケルノミコト伝説、そして「死と再生」という医療に関係の深いテーマへ結びつける、またまた我田引水感満載の話を書きました。

第 28 巻

個人的になのですが、2月の国家試験シーズンの前には、京都の天神さんこと北野天満宮に行って、その年に国家試験を受ける学生の名前を全員絵馬に書き込んで合格祈願をします。普段信心しているわけでもありませんので、要するに困ったときの神頼みなのですが、編集後記では、神様へのお願い事は古来「言挙げ」といって「口に出す」「紙に書く」ものなのであるという話から、研究もまた然りで、ちゃんとペーパーにしないと研究したことにならないのであり、本誌はそのために存在するのだ、ということを書きました。実際のところ編集後記などほとんど読んでいないという気の緩みからか、かなり無理矢理かつ上から目線の文章です。

第 29 巻

平成 29 年 5 月の編集後記になりますが、この時はよい話題も思いつかず、自宅の庭に咲いている花の話を書きました。この時期の庭は、次から次へ主役が入れ替わるように花が咲くのですが、少し気を抜くと雑草が生いしげり、ややもすると全く植えた記憶の無い花が咲き出して驚かされることもしばしばです。この

様子を最近流行の「多様性」という言葉で説明を試みました。要するこの言葉を使いたかっただけなのですが。つづいて当時芍薬の花が最盛期を迎えていましたので、「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」などという言い回しと生薬の話について書きました。

以上のような編集後記でしたが、並べてみると実に関係のない話を連ねたものだと、我ながら少々呆れています。編集後記という公共の場にお前のくだらぬ話を書くなんぞインクの無駄でしかないと叱責されるかもしれませんが、藍野紀要 30 巻の歴史に免じて、何卒ご容赦くださいますようお願い申し上げます。

ところでここまで触れませんでした、編集後記の最後の文章はほぼ共通しています。それは『査読を快くお引き受けいただいた先生方、そして膨大な事務処理を黙々とこなされた事務局の方々に深く御礼申し上げます。』という謝辞です。ほぼ毎回同じ内容で、コピペの謗りを免れないわけですが、そんなことはありません。毎回真剣にそう思っています。実際のところ査読の先生方や事務処理の方々がおられない事には本誌は全く成り立たないわけですから。ということで今巻の編集後記でも同じ文章を使用させていただきます。

前号である 29 巻では論文数は 10 編でした。上にも書きましたが一時期 5 編まで落ち込んだものが少しずつですが回復の基調にあるようです。皆さんのお力添えによりまして、学校のみならず病院の関係の方々など藍野グループの全員の発表の場として、藍野紀要がこれからますます発展していきます事を願ってやみません。